

## 4.長岡京跡右京第996次(7ANGHK-3地区)

### ・上里遺跡発掘調査報告

#### 1. はじめに

今回の調査は、外環状線第5工区地方道路交付金(街路)業務委託に係わり、京都府建設交通部の依頼を受けて実施したものである。調査地は、長岡京跡では右京二条三坊三町と西二坊大路路面の推定地にあり、上里遺跡の南東端に位置する。周辺の調査では、近年、京都市西京区上里遺跡の調査で、縄文時代晩期の竪穴式住居跡群や土器棺墓及び弥生時代前期の竪穴式住居跡群などが検出され、弥生文化受容期の様相を解明する大きな成果が得られている。また、本調査地の北西の長岡京市立第十小学校建設に伴う右京第22・25次調査では、縄文時代後期や弥生時代前期の土坑が検出され、隣接する右京第986次調査では弥生時代前期～中期とみられる流路が確認されている。前述した右京第22・25次調査では、古墳時代の旧流路を検出しているほか、杭で護岸された溝群により区画された奈良時代の水田・畠地と推定される遺構が確認され、「弟国」と書かれた墨書土器が出土した。さらに、同調査では、四町規模の宅地から長岡京期の遺構としては最大級の規模の南北に廂がつく掘立柱建物跡が検出され、また当調査地北側の右京第547次調査では、「安麻呂此□」と人名が墨書された須恵器が出土している。

本報告は、高野が執筆した。なお、国土座標の表示は、日本測地系の第Ⅵ座標系を用い、長岡京の条坊表記は、山中章氏が提示した条坊表記によるものである。<sup>(注1)</sup>

調査にあたっては、京都府教育委員会、長岡京市教育委員会、(財)長岡京市埋蔵文化財センター、地元自治会をはじめ多くの方々にご指導・ご協力をいただいた。記して、謝意を表す。

現地調査責任者 調査第2課長  
肥後弘幸  
調査担当者 調査第2課主  
幹調査第3係  
長事務取扱



第1図 調査地周辺主要遺跡分布図  
(国土地理院 1/25,000 京都西南部)

石井清司

同 調査員 高野陽子

調査場所 長岡京市井ノ内上印田地内

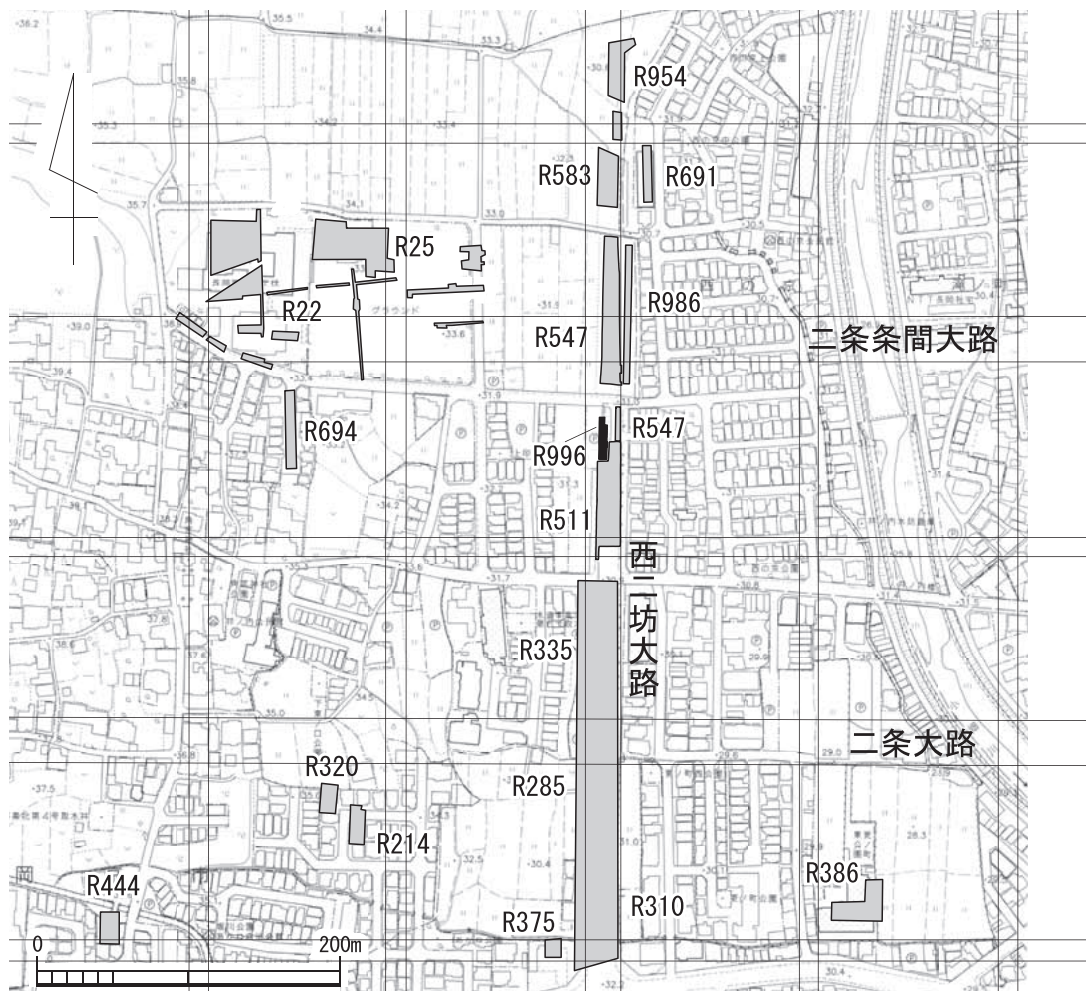
現地調査期間 平成22年4月26日～6月5日

調査面積 125㎡

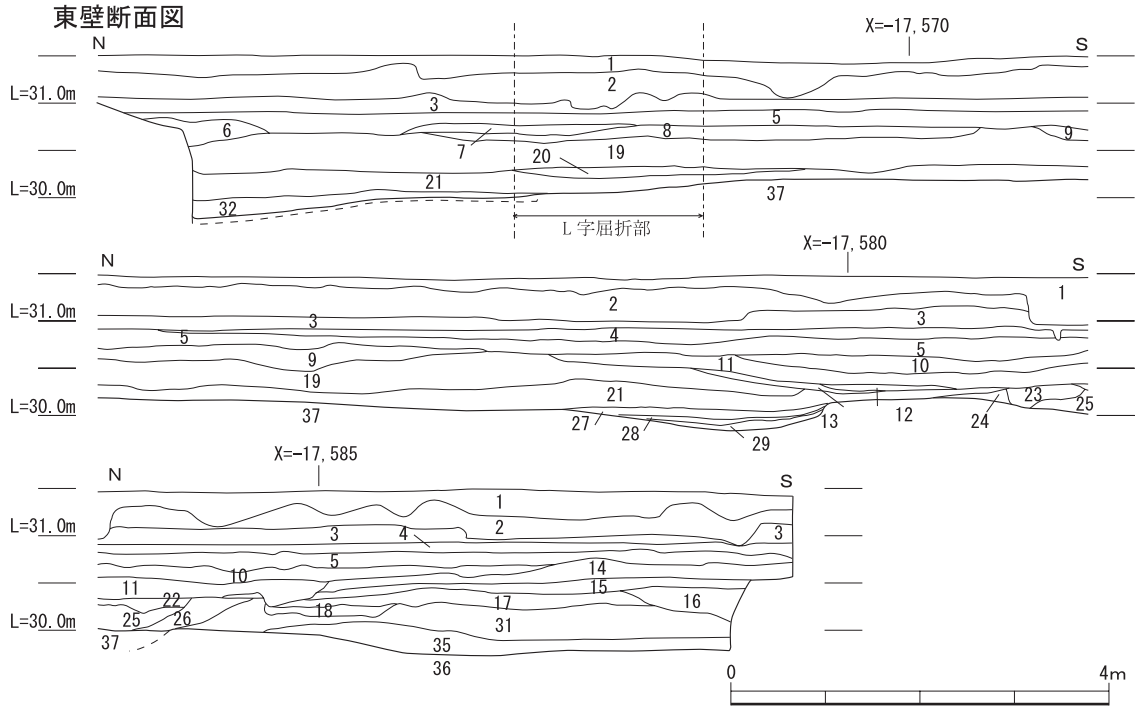
## 2. 土層(第3図)

本調査では、昨年度調査された右京第986次調査の南隣接地にあたる路線区内に、南北に長い調査区を設定した。調査区は、長岡京跡では西二坊大路と二条条間大路の交差点をやや南に下がる地点である(第2図)。調査は、客土を中心とした表土および旧耕作土を重機により除去したのち、人力で掘削・精査を行った。

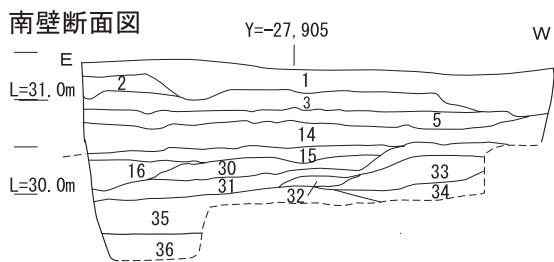
調査区は、北部から南部に向かってわずかに下がる地形である。客土を除去したのち、地表下約0.4m、標高約31m前後で、旧耕作土とみられる灰色粘質土(第3層)を検出した。基準層位は、その下層に黄褐色粘質土(第5層)、暗オリーブ灰色砂混じり粘質土(第10層)が約20cmの厚さで堆積する。南部を中心に、さらに、標高約30.3～30.5mでは、オリーブ黒色砂質土(第14層)が堆



第2図 調査地周辺調査トレンチ配置図

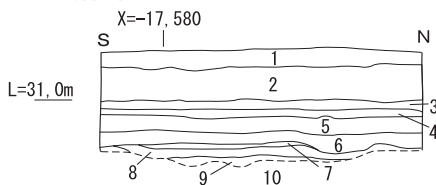


- |   |  |
|---|--|
| <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 灰色砂礫土&lt;客土 碎石含む&gt;</li> <li>2. 黄褐色砂礫土 (2.5Y5/4)&lt;φ2~5cm大の礫&gt;</li> <li>3. 灰色粘質土 (旧耕作土) (7.5Y4/1)</li> <li>4. にぶい黄褐色粘質土 (2.5Y6/4)</li> <li>5. 黄褐色粘質土 (2.5Y5/3)</li> <li>6. 黄灰色砂礫土 (2.5Y4/1)&lt;φ2~3cm大の礫&gt;</li> <li>7. 灰色オリブシルト混じり砂質土</li> <li>8. 黄灰色中砂 (2.5Y5/1)</li> <li>9. 灰色砂礫土 (7.5Y4/1)</li> <li>10. 暗オリブ灰色砂混じり粘質土 (2.5GY4/1)</li> <li>11. オリブ黒色砂混じり粘質土 (5Y3/2)</li> <li>12. 黒色シルト (2.5Y6/4)</li> <li>13. 暗オリブ色 (5Y4/3)</li> <li>14. オリブ黒色砂質土 (5Y3/2)</li> <li>15. 灰オリブ砂礫混じり粘質土 (7.5Y4/2)<br/>&lt;鉄分多く含む&gt;</li> </ol> | <ol style="list-style-type: none"> <li>16. 灰色砂礫土 (7.5Y4/1)&lt;φ2~5cm大の礫&gt;</li> <li>17. オリブ黒色シルト混じり中砂 (7.5Y4/1)</li> <li>18. 暗オリブ灰色砂礫土 (2.5GY4/1)</li> <li>19. 灰色粗砂 (5Y4/1) + オリブ褐色 (2.5Y4/4)</li> <li>20. 暗オリブ褐色砂礫土 (2.5Y3/3)<br/>&lt;φ1~2cm大の礫&gt;</li> <li>21. オリブ黒色シルト (5Y3/2)</li> <li>22. 暗オリブ灰色シルト混じり砂質土 (5GY4/1)</li> <li>23. オリブ灰色砂混じり砂質土 (5GY5/1)</li> <li>24. 暗オリブ灰色細砂 (2.5GY4/1)</li> <li>25. 暗オリブ灰色シルト混じり砂質土 (5GY4/1)</li> <li>26. オリブ黒色細砂 (5Y3/2)</li> <li>27. 黒色シルト (10YR2/1)</li> <li>28. 黒褐色粘質土 (10YR3/2)&lt;植物遺体多く含む&gt;</li> <li>29. 黒褐色粘質土 (10YR2/2)&lt;植物遺体多く含む&gt;</li> </ol> |
|---|--|



30. 暗緑灰色粗砂 (10G4/1)
31. 灰色砂礫土 (7.5Y4/1)  
<φ礫2~3cm大の礫>
32. 黒色シルト (2.5Y2/1)<植物遺体多量に含む>
33. 暗緑灰色シルト混じり砂質土 (7.5GY4/1)
34. 暗緑灰色砂シルト (10GY4/1)
35. 黒色シルト (2.5Y2/1)<植物遺体含む>
36. 暗緑灰色砂礫混じり粘質土 (7.5GY4/1)
37. オリブ灰色粘土 (5GY5/1)

西壁断面図 (※上層遺構面溝SD2検出層位)



- |   |   |
|---|---|
| <ol style="list-style-type: none"> <li>1.</li> <li>2.</li> <li>3.</li> <li>4. 暗灰黄色砂混じり粘質土 (2.5Y4/2)</li> <li>5. 灰色砂質土 (5Y4/1)</li> <li>6. 灰色シルト混じり砂質土 (7.5Y4/1)</li> <li>7. 灰オリブシルト混じり砂礫土 (5Y4/2)</li> <li>8. 灰色砂質土 (10Y5/1)&lt;SD2埋土&gt;</li> <li>9. 灰色砂礫混じり粘質土 (10Y5/1)<br/>&lt;SD2埋土 φ1~3cm大礫多く含む&gt;</li> <li>10. 緑灰色シルト混じり粗砂 (7.5GY5/1)</li> </ol> | <p>1. } 南壁と同じ</p> <p>2. }</p> <p>3. }</p> |
|---|---|

第3図 調査地土層断面図

積し、奈良時代以降の上層遺構の基盤面として、灰色粗砂(第19層)を約40cmの厚さで確認した。さらに、下層では、オリーブ黒色シルト(第21層)を20～30cmの厚さで確認し、次いで植物遺体を多く含む黒色シルト(第32層)を検出した。黒色シルトは、北部では下層堆積土の基盤となるオリーブ灰色粘土(第37層)の直上に形成されている。

暗オリーブ灰色砂混じり粘質土(第10層)は、中世の包含層であり、瓦器片が出土した。その下層のオリーブ黒色砂質土には瓦器片は含まれず、奈良時代から平安時代前期とみられる須恵器片が出土している。この層位には、古墳時代後期の須恵器、さらに弥生時代前期の長原式とみられる深鉢小片も出土している。

### 3. 検出遺構

主な検出遺構は、上層遺構では、奈良時代に掘削されたとみられる溝SD1・SD3のほか、奈良～平安時代と推定される土坑SK7・SK6、砂礫の集積である整地面SX5、中世以降の自然流路とみられる流路SD2・SD8などがあげられる。さらに、こうした上層遺構の基盤である灰色粗砂を除去した下層で、流路SD10、落ち込みSX11等を検出した。下層面では、後述のように遺構内を含めて遺物の出土はなく、時期は不明である。

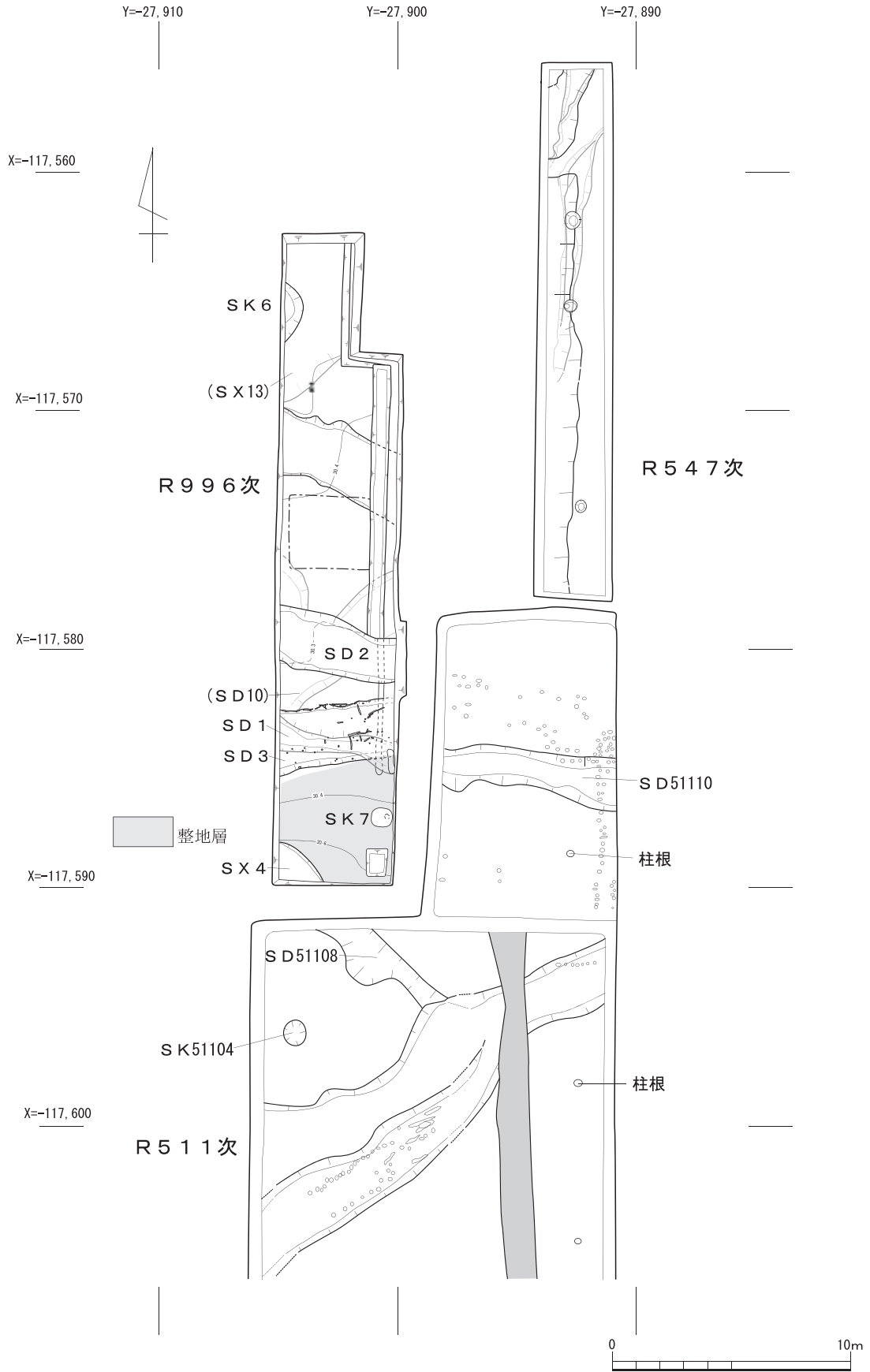
#### 1) 下層遺構(第5図右)

**流路SD10・落ち込みSX11** 下層面の中央で検出した。検出面の標高は約30.0mである。SD10は、幅2.5～2.7m、深さ0.2～0.3mを測る。SD10は、西へ向けて落ち込み状に広がり、この部分をSX11とした。SX11は、南北方向の流路の可能性はある。溝内からは加工された杭の可能性のある木製品1点が出土したが、土器が含まれていないため、時期は不明である。時期判定の参考資料とするため溝内の炭化物を加速器による放射性炭素年代測定を実施したところ、おおよそ縄文時代晩期前葉頃の測定年代を得ている。<sup>(注2)</sup>

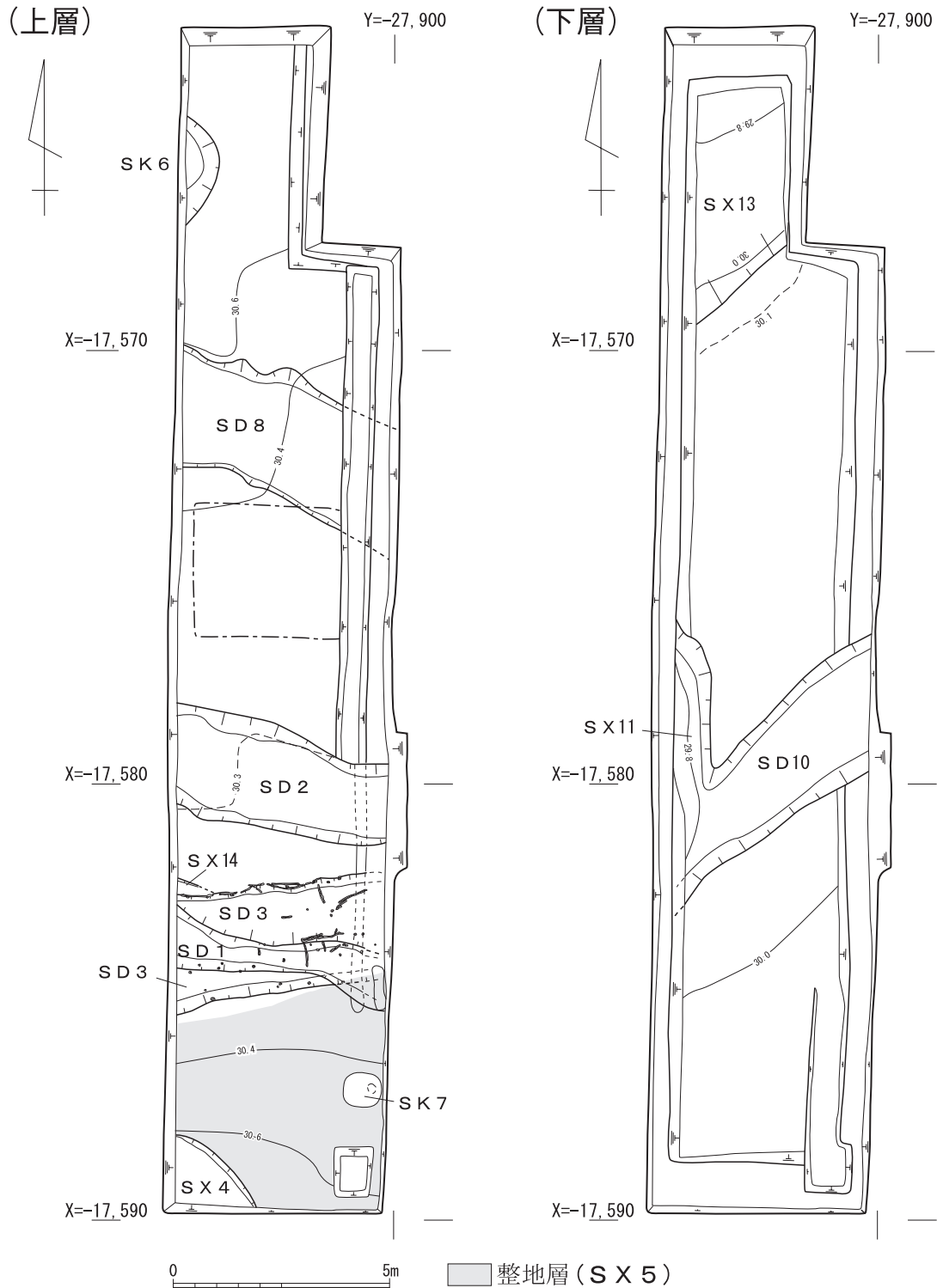
**落ち込みSX13** 調査区北部で検出した落ち込みである。北へ向けて緩やかに傾斜し、調査区外へ延びるとみられる。遺物は出土せず、時期は不明である。

#### 2) 上層遺構(第5図左)

**溝SD3** 調査区南部で検出した東西方向の溝である。幅2.4～2.5m、深さ約0.5mを測る。東西方向に均等な溝幅をもって掘削され、溝の両側では杭列を検出したが、一部横板材や棒材が確認できることから、これらを側板として護岸したとみられる。南辺は、2段状に緩やかに立ち上がり、それぞれ杭列を確認した。南側の杭列は数本が遺存するにすぎないが、建設当初の溝幅のラインを示すものであろう。溝幅はやや小さく改修され、北側杭列が設けられたとみられる。杭には、角材や丸太材が用いられている。溝の北辺では、北西隅で木杭により固定された槽が出土した。木製槽は半裁され、把手を東側に残したもので、設置点を取水口として、その水量の調整に用いたと推定される(木組遺構SX14)。出土遺物はいずれも細片で時期の確定は難しいが、おおよそ奈良時代に帰属する須恵器・土師器片が出土している。過去の周辺の調査では、右京第22・25次調査で同様の構造をもつ奈良時代の溝群が検出されていることから、長岡京造営の前段



第4図 調査地周辺主要遺構分布図

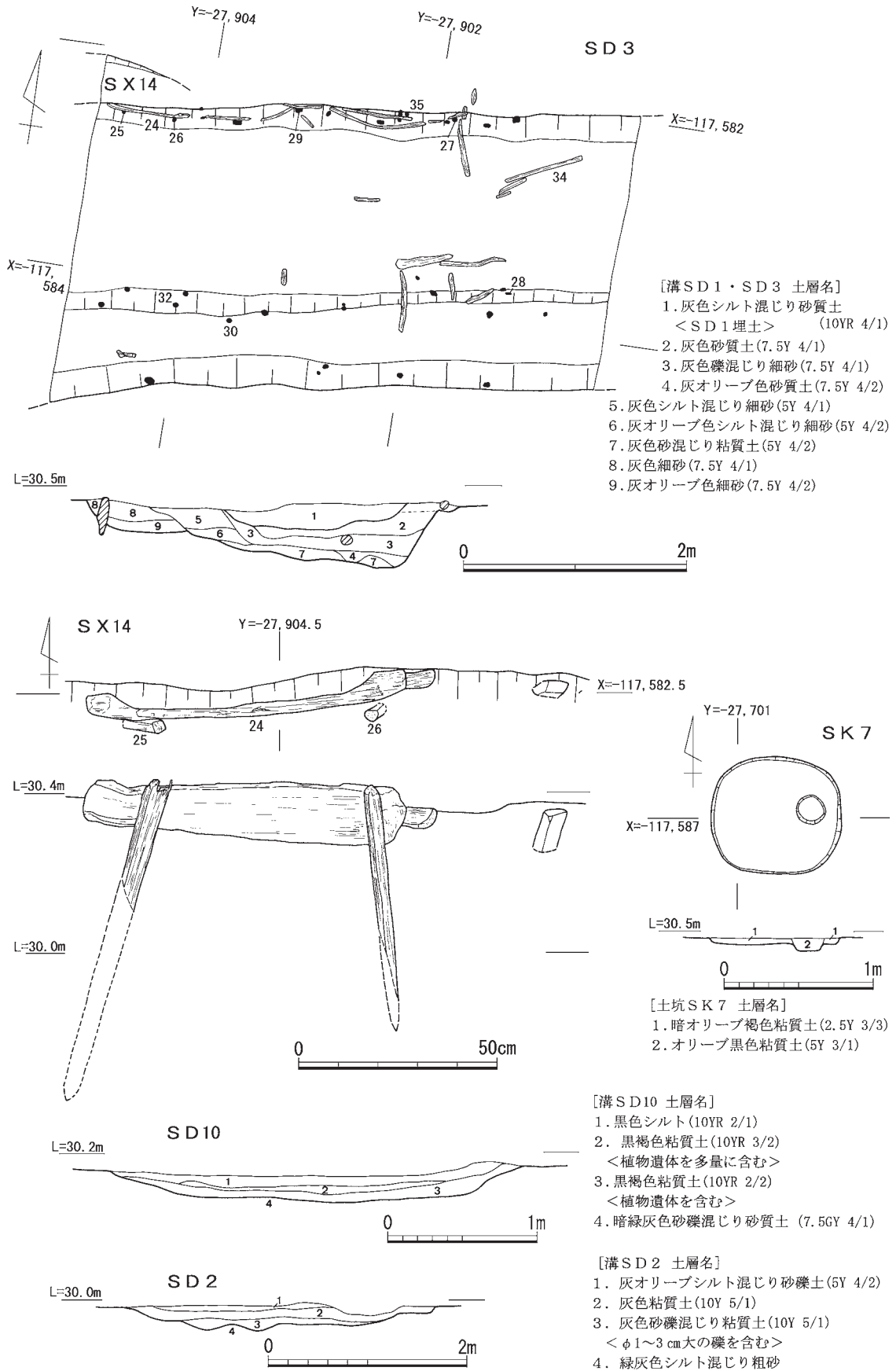


第5図 調査地検出遺構配置図

階に掘削された溝である可能性が高い。

**溝SD 1** SD 3と重複して検出した幅0.6~1.2m、深さ約0.2mの浅い溝である。東に隣接する右京第511次調査で検出したSD51110に繋がるとみられる(第4図)。溝内からは、わずかながら須恵器片が出土し、溝SD 3が埋没する過程で形成された溝とみられる。

**土坑SK 7** 南部で検出した方形の浅い土坑である。一辺約0.8m、深さ約0.1mを測る。柱穴



第6図 溝SD1・2・3・10土層実測図、土坑SK7・溝SD3内護岸施設実測図

の可能性があるが、隣接地の調査を含め関連する遺構は確認されていない。

**土坑SK6** 調査区北部の西壁に接して検出した土坑である。半円形状に一部を検出し、直径2.4m、深さ0.2mを測る。土坑内から、須恵器片が出土している。

**落ち込みSX4** 調査区南西隅で検出した。南西に向け傾斜するが、調査範囲内では立ち上がりを確認していない。右京第511次調査のSD51108の延長部にあり、その一部と推定される。

**砂礫集積SX5** 調査区南部で検出した砂礫層の広がりである。φ3～5cm前後の多量の砂礫を含む粘質土層の広がり、堅く平坦な面を形成し、整地された層とみられる。調査区南端から約5.3mにわたって、調査区幅(5m)で検出している。SD1南部上層にも一部堆積し、溝の廃絶後に整地されたとみられる。この整地面直上では、布目瓦片3点や瓦器片が出土し、平安時代後期から鎌倉時代にかけて形成された整地層と推定される。

**流路SD2** 調査区中央で検出した。幅1.6～1.9m、深さは約0.15mを測る。遺物は出土していないが、層位的に中世以降に形成された自然流路とみられる。

**流路SD8** 北部で検出した幅2.5～3.0m、深さ約0.1mの流路である。SD2よりもさらに上層でされることから、中近世の自然流路と推定される。

#### 4. 出土遺物

##### 1) 土器・瓦(第7図)

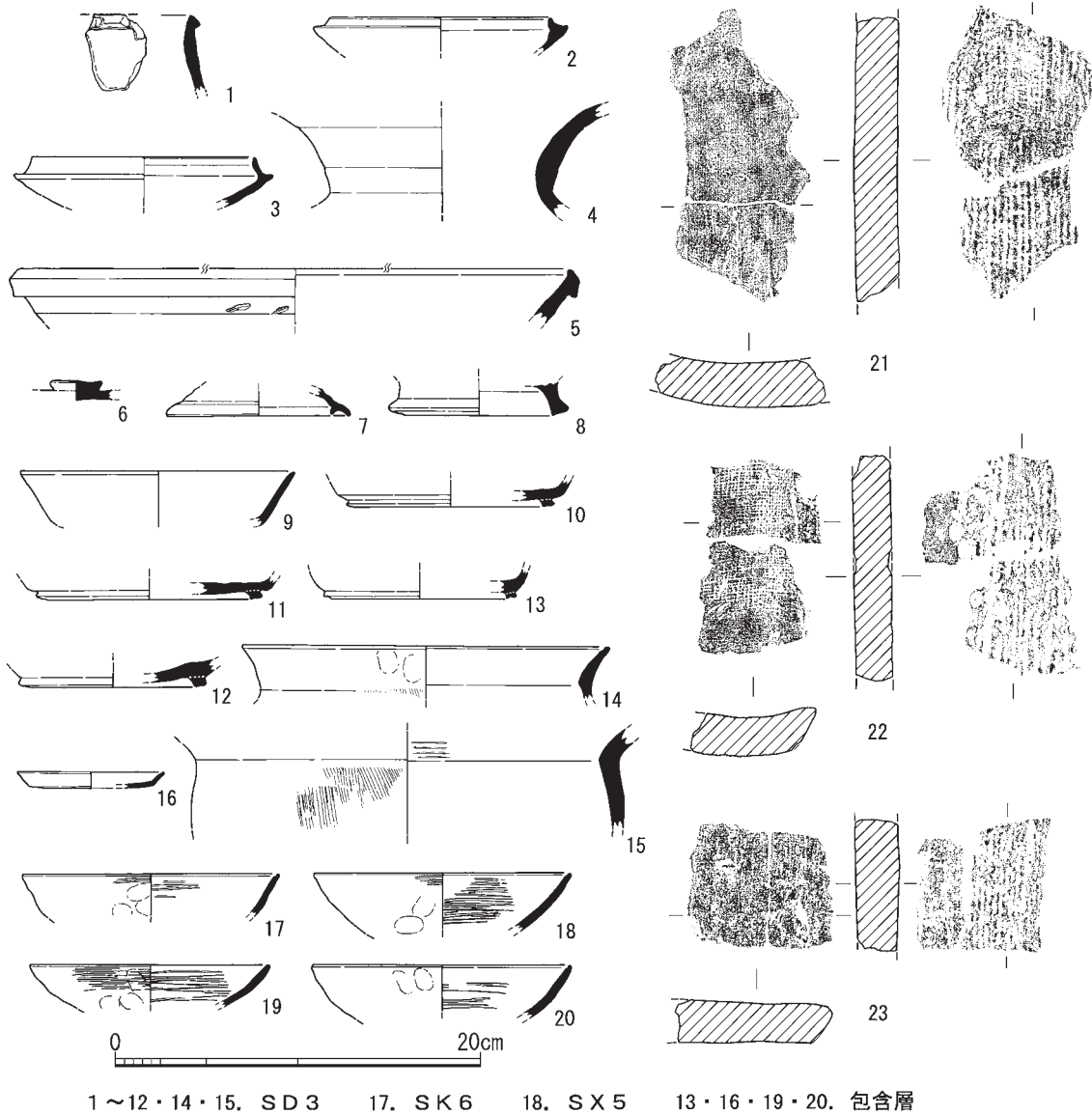
出土遺物は整理箱にして、3箱である。

1～12・14・15は、杭列のある溝SD3から出土した。1～5は、SD3が形成される以前の時期のもので、いわゆる混じり込みの遺物である。1は、突帯文土器の小片で、口縁部上端に突帯がめぐる弥生時代前期の長原式の深鉢の口縁部とみられる。2・3は、古墳時代の須恵器杯身である。杯身は立ち上がりが低いもの(2)と高いもの(3)があり、おおよそ陶邑窯TK43～209型式に帰属する。4・5は、須恵器甕の口頸部で、5の甕には外面に刺穴痕がみられる。

SD3に伴う土器群は、6～12・14・15であり、いずれも小片ではあるが、おおよそ奈良時代に帰属する資料である。6～12はいずれも須恵器で、6は杯B蓋の宝珠つまみの一部であり、7は内面に返りをもつ杯蓋である。口径10.0cmを測る。8は、壺脚部とみられる。9は杯Aの口縁部で、口径15.0cmを測る。10・11は高台付きの杯Bの底部である。10は底径約11.3cm、11は12.3cmを測る。12は高台付きの壺底部とみられ、底径10.2cmを測る。14の土師器甕は、口径20.0cmを測る。15の土師器甕は、口縁端部を欠くが、口縁内面に粗いハケ調整が認められる。

13・16・17～20は、包含層中から出土した。13は、調査区南部から出土した。須恵器杯Bの底部とみられ、おおよそ長岡京期から平安時代前期に帰属する。16は、調査区南部上層で出土した中世後期の土師器皿である。口径8.0cmを測る。17は、北部の上層遺構の精査中に出土した瓦器椀で、14.0cmを測る。18は、砂礫集積(整地層)SX5の上面で出土した瓦器椀で、口縁端部に段をなし、内面のミガキは密に施されるもので、12世紀前半の所産とみられる。19・20の瓦器椀はいずれも南部包含層中から出土した。



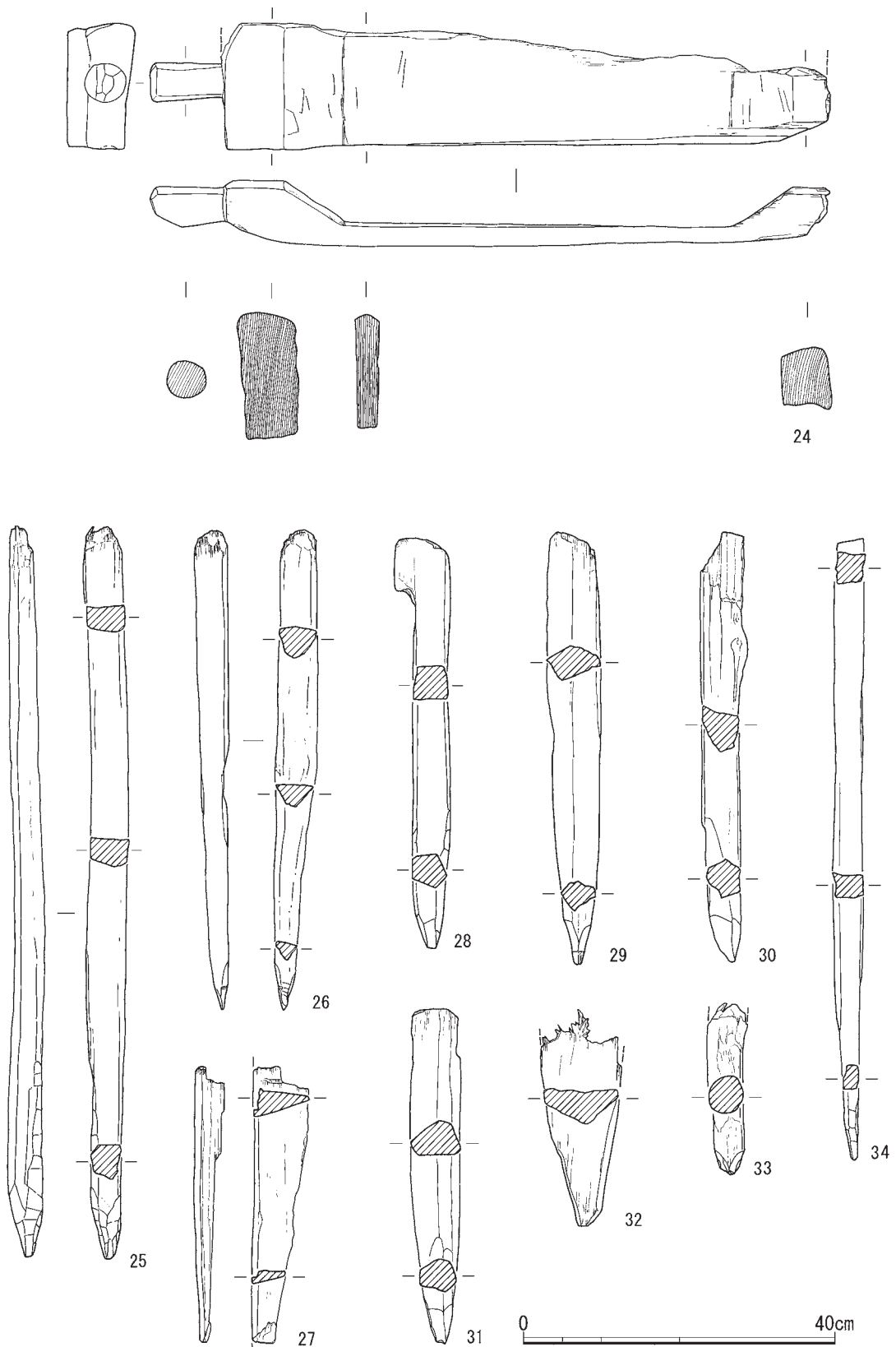


第7図 出土遺物実測図(1)

21~23の瓦は、砂礫集積(整地層) SX 5の検出面で出土した平瓦である。凸面に縦縄目タタキが施され、内面には布目圧痕がみとめられる。22・23の周縁と端面は、ケズリ調整して仕上げている。いずれも2次的な焼成を受けた痕跡がみられる。

## 2) 木製品(第8図)

木製品には、槽1点と杭がある。24~34は、いずれも溝SD3および木組遺構SX14から出土した。1は、横木取りの材を削り抜いて作られた槽の一部である。削り物として作られた容器であるが、その中央を裁断して、細長い長方形の材として整え、溝の取水口に転用材として用いられていた。長辺の両側面のうち、片面は鋭利な刃物によって裁断されているが、もう一方は、破損および腐食が進行している。短辺の片側には把手が作り出され、把手部を含めた全長は86.5cm、残存幅は16.0cmを測る。槽は内外面とも底部は平坦に薄く作られ、厚さ3.0cmを測る。また短辺側の周縁部は厚く仕上げられ、厚さ7.2cmを測る。把手の断面は径約5cmの円形を呈し、



24~26. S X 14 27~34. S D 3

第8図 出土遺物実測図(2)

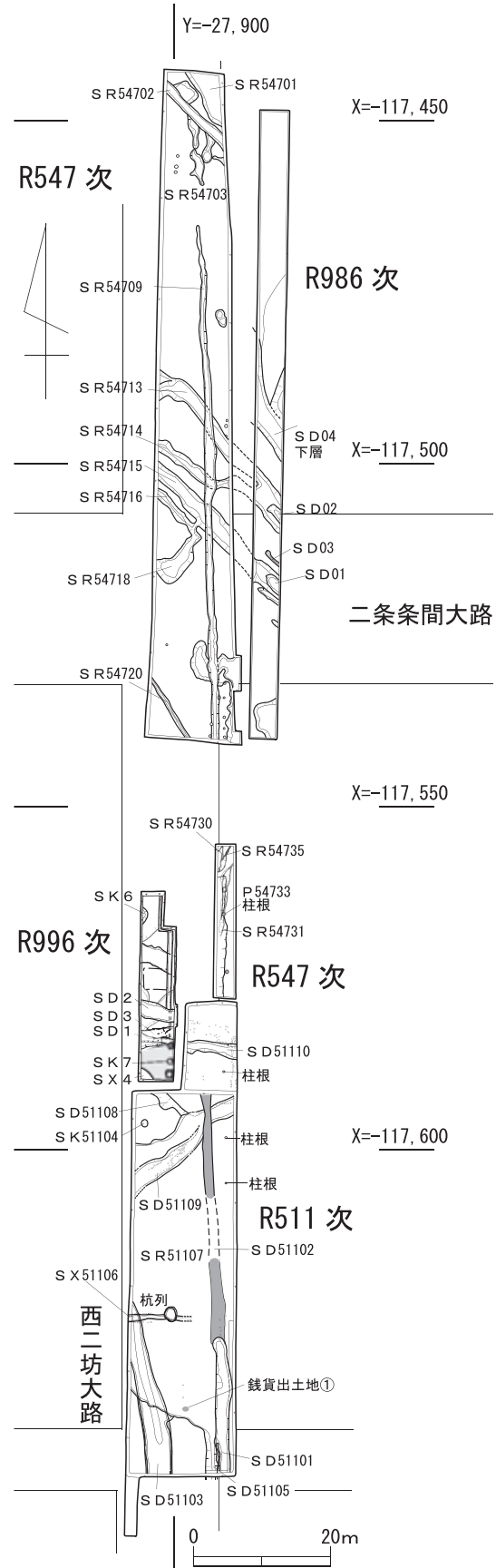
基部側が先端部に比べ細く削り出されている。内面周縁部には、工具による加工痕がみとめられる。

杭は約35点が出土し、このうち10点を図化した。杭のうち、25・26の杭は、槽を固定していた杭である。25は、断面が方形の角材で、長さ94cmを測る。26は、断面が扇形をなし、丸太材を縦割りしたもので、長さ62cmを測る。27～34の杭は、いずれもSD3の杭列を構成するものである。杭列に用いられていた杭は、約8割以上が丸太材を縦割りした断面扇形の杭(29・30・31・32)であるが、一部に丸太杭(33)や、断面方形に加工された角杭(34)のほか、引戸の敷居の一部を転用した杭(27)がある。

### 5. まとめ

今回の調査では、杭を打ち込み護岸した奈良時代と推定される溝や、平安～鎌倉時代にかけての土坑や流路、砂礫が集積した整地面などを確認した。また、下層調査では、植物遺体を多く含む流路跡を検出した。

調査地は、上里遺跡の遺跡範囲の南東隅にあたる。京都市域にあたる上里遺跡北部を中心とした近年の調査では、縄文時代晩期から弥生時代前期の竪穴式住居跡や土坑等の遺構が相次いで調査され、本調査地北西約250mの地点の右京第22・25次調査でも縄文時代後期と弥生時代前期の遺構や遺物が確認されている。また調査地北に隣接する右京第986次調査では、縄文時代晩期の土器、弥生時代前期から中期初頭の流路や土器が確認され、東に隣接する右京第547次調査でも、若干の土器を含む弥生時代前期と推定される流路が検出されている。今回の調査で検出した下層遺構の流路SD10は、右京第547次調査の北東から名正方向に検出された流路の南西延長部となる可能性が高い。出土遺物は、植物遺体のなかに、加工した杭の可能性



第9図 周辺調査地主要遺構分布図

があるもの1点が出土したにとどまるが、溝SD03からは弥生時代前期の長原式の突帯文土器が出土している。こうしたことから、流路SD10については弥生時代前期の溝の可能性が高いと考えられる。ちなみに、流路内に堆積する黒色シルト土壌内の炭化物を対象とした加速器による放射性炭素年代分析では、縄文時代晩期前葉頃の測定年代が出ている<sup>(注3)</sup>。

歴史時代の遺構では、杭列で護岸した東西方向の溝SD3は特に注目される遺構である。溝内から出土した土器は、わずかであるがおおよそ8世紀代に帰属するものが多い。この溝と構造的に類似する杭列で護岸された溝は、本調査地の北西約250mの右京第22次・25次調査の溝SD2514～SD2519があり、本調査地の南約40m地点の第511次調査において検出された東西方向の杭列SX51106も同様の溝の護岸とみられる。後者は、遺物は乏しいながらも長岡京期から平安時代前期の遺構とされるが、前者は奈良時代の溝と確認されているものである。調査地周辺では、調査地南約200mの右京第310次調査の更ノ町遺跡では、二条大路と西二坊大路の交差点で奈良時代の石敷施設を伴う井戸が検出され、木簡、「園司」・「園宅」・「園」などの墨書土器がまとまって出土し、一帯が天皇家供御の菜園である「乙訓園」に関係すると推定されている<sup>(注4)</sup>。前述した右京第22次・25次調査の杭列溝群は、長方形に区画された水田や畠地を区画する溝とされ、「乙訓園」に関係する生産遺構の可能性が指摘されている<sup>(注5)</sup>。本調査で検出した溝SD3も、出土遺物は細片であり時期の詳細な把握は難しいが、多くはおおよそ奈良時代に帰属するとみられ、長岡京造営の前段階に掘削された同様の性格をもつ溝となる可能性が高いものである。

今回の調査では、長岡京期の確実な遺構は確認していない。調査地は、東西条坊路である二条条間大路と南北条坊路である西二坊大路との交差点の南にあたる。二条条間大路は、右京域ではこれまで確認されていないが、西二坊大路は、調査地南方約50mの地点で、右京第511次調査において、東側溝と推定される溝が検出され(第9図SD51105)、右京第335次・310次調査などでも確認されている。他の大路が約24mであるのに対して路面幅は狭く、13～19mほどの規模とされる。調査区は、この路面範囲のなかにおさまると推定される(第9図)。調査区南部では、砂礫が集積する整地層を確認しているが、整地面直上から瓦器片が出土したことから、平安時代後期以降に造成された整地面と推定され、長岡京期の路面に対応する遺構は確認できなかった。調査区周辺は、小畑川に向かって下降する扇状地の先端にあり、条坊路の路面は、周辺調査でも確認された洪水層や後世の遺構により削平されたと推定される。

注1 山中章「古代条坊制論」(『考古学研究』第38巻第4号)1992

注2 分析は(株)加速器分析研究所に委託し、C<sup>14</sup>年代は、2980±30yrBPの測定値を得た(1311calBC-1211calBC 95.4%)。おおよそ縄文時代晩期前葉頃に相当する。

注3 注2に同じ

注4 石尾政信・土橋誠「長岡京跡右京第285・310・335次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第45冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1991

注5 山本輝雄『長岡京跡右京第22・25次調査報告書-長岡京跡右京二条三坊二・七町、上里遺跡-』(財)長岡京市埋蔵文化財センター 1997

# 圖 版



(1) 調査地全景(南から)



(2) 調査区南部全景  
＜上層＞（北から）



(3) 調査区中央遺構検出状況  
＜上層＞（東から）



(1) 砂礫集積 S X 5 検出状況  
＜整地面＞（北から）



(2) 砂礫集積 S X 5 瓦出土状況  
（上が南）



(3) 落ち込み S X 4 検出状況  
（北東から）



(1)土坑 S K 6 検出状況(南東から)



(2)土坑 S K 7 検出状況(南から)



(3)溝 S D 1 検出状況(東から)





(1) 調査区南部遺構検出状況  
<上層> (南から)



(2) 溝 S D 3 検出状況(東から)



(3) 溝 S D 3 土層断面(東から)



(1) 調査区全景<上層> (北から)



(2) 調査区全景<上層> (南から)



(1)溝 S D 3 全景(東から)



(2)溝 S D 3・木組遺構 S X 14 検出状況<上層> (南東から)



(1) 木組遺構 S X14 検出状況  
(南東から)



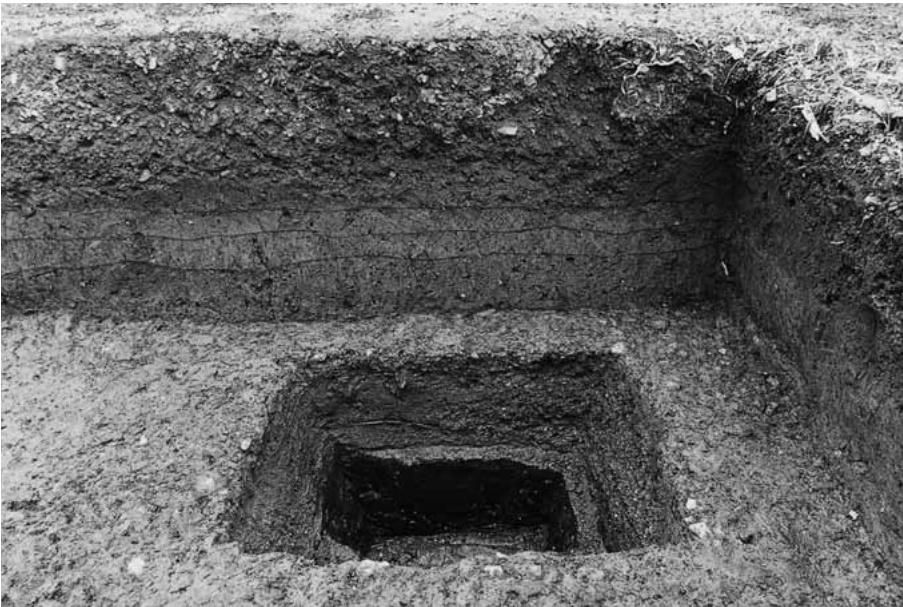
(2) 木組遺構 S X14 検出状況  
(南から)



(3) 木組遺構 S X14・南壁土層断面  
(南東から)



(1) 調査区西壁中央土層断面  
＜上層＞（西から）



(2) 調査区西壁南部土層断面  
＜断ち割り部は下層＞（西から）



(3) 調査区西壁北部土層断面  
（西から）



(1) 下層遺構検出状況(北から)



(2) 流路 S D10 全景(東から)



(3) 流路 S D10 土層断面<西壁>  
(東から)

